

第9話「境界を守る夜の戦い」

夜の帳が降り、世界が静寂に包まれるとき、
魂の扉は半ば開かれ、見えぬものが行き来するという。

ある夜、深き眠りに落ちようとした一人の女に、異界の風が忍び寄った。

闇の中、扉がきしむこともなく開き、名もなき影が部屋に入り込む。
影は助けを求めるように、あるいは侵すように、彼女の胸元に迫った。
その恐ろしさは、現実のものとも夢のものともつかず、ただ心を締め付けた。

だが女は、恐怖に飲まれなかった。
胸の奥から、祖先より受け継いだ光の言葉が溢れ出た。
南無阿弥陀仏、真言の響き、
そして「悪霊退散」という一喝。
その声は静寂を裂き、部屋に満ちる闇を押し退けた。

影は呻き、形を失い、夜の彼方へと消え去った。
そのあとに残ったのは、深い吐息と、生きている証の鼓動だけだった。

この出来事は、魂の書にこう刻まれた。
「境界を守る者は、他者の闇に吞まれぬ。
祈りの光は、自らの内なる力であり、
侵入者をも癒す炎である。」

女は知った。
襲いかかる影は、外から来たものだけではない。
助けを求める声、救えぬ悲しみ、自らの中に残る不安の化身でもあったと。
そして彼女は決めた。
これからも声を聞くことはあっても、己の領域を守りながら、真の光を携えて進むと。

